



# 「下村満子の生き方塾」ニュース

vol.26 2021.10

—XI期修了・XII期入塾式&amp;創立10周年記念公開講座特集号㊦—



## 脱原発には保守も革新もない

——小泉元総理が特別講演

「下村満子の生き方塾」創設10周年記念の公開講座は2021年4月17日、福島県二本松市の福島県男女共生センターで「必ずできる！ 日本は自然エネ大国を目指せ!!」をテーマに掲げて開かれました。ニューズレター㊦では第2部の「日本の進むべき道」と題した小泉純一郎元総理の特別講演要旨をまとめました。

(文・構成/皆川猛)

### ● 原発の三大大義名分は、嘘だと分かった

—10年前の2011年3月の福島第一原発事故は、原発は本当に恐ろしいことを教えてくれました。私の前には、脱原発運動を進めている下村満子さん、佐藤彌右衛門さんらが座っておりますが、その下村さんたちの前で、なぜ私が原発ゼロを目指しているのかを話せることは、とても幸せだと思っています。

福島事故までは、反原発を唱える人は、左翼だと思われていました。人は変わるのです。今は、自民党総裁を務めた者や臨席している中川秀直・元自民党幹事長らも反原発、脱原発に関わっています。原発をなくす運動には右翼も左翼も、保守も革新もありません。

総理をやっていたころ、原発反対の声もありました。アメリカ・スリーマイル島、ウクライナ(当時はソ連)チェルノブイリでの原発大事故も分かっていました。それでも、資源小国の日本にとって、原発は発電コストが安く、二酸化炭素を出さないクリーンエネルギー。外国では事故があっても、日本の原発は世界一安全な原発だと、経産省の役人から吹き込まれ、それを信じていました。

しかし、福島原発事故のニュース映像で、巨大津波や地震で家を壊され、追い打ちをかけるように放射能汚染で身の回りの物しか持たずに故郷を追われる住民の姿を見せられました。逃げる、避難と言っても、放射能汚染は広範囲にわたりますから、近場には逃げ場はありません。県外に避難先を求める光景に、啞然とすると同時に、これはおかしいと思いました。総理を引退し、国会議員も辞めていたので、時間はあります。手当たり次第に原発に関する様々な本、報告を読み、原発反対論者の話も聞きました。すると、経産省や電力会社が言っている「安全」「安い」「グリーン」の原発の三大大義名分は嘘だ、と分かりました。

政界から引退したのだから、政治に口出しをしてはいけない、と考えていましたが、原発事故で逃げ惑う住民の



日本に原発は要らないと力説する小泉元総理

姿を見て、見ないふりをしているのは、総理経験者として卑怯だ、と思うようになったのです。中国の格言に「過ちて改めざる、これを過ちと言う。過ちて改むるに憚ることなかれ」というものがあることを思い出しました。それにはもっと勉強をしなくてはならない、と決心しました。

事故から少し経ってから、東電は変なことを言うようになりました。「被災者を保障する金がありません」「事故を起こした原子炉を廃炉にしたいが、資金がありません」「原発の安全対策にけるお金がありません」「これらのお金を、国で面倒見てください」と言うのです。国営でもないのに、どうして国が東電の面倒を見て、事故の尻拭いをしなければならないのでしょうか。

事故は東電の責任なのか、国の責任なのか、モヤモヤしたままでしたので、国会事故調査委員会座長の黒川清先生を訪ねて話を聞き、また事故調が国会に出した提言も読みました。黒川先生や提言によれば、事故の根源的な原因は、原発の安全運転を監視・チェックする当時の原子力安全委員会や原子力安全保安院(この2つの組織は

2012年9月廃止され原子力規制委員会が発足)が原発推進側の「とりこ」になっていることにある、というものです。福島のリルトダウンは、地震や津波といった天災によって起きたのではなく、経済的に負担が大きくなるので改善の指摘を無視した結果起きた人災であることも事故調の報告で分かりました。チェルノブイリ原発事故の時、当時の科技庁原子力局長は、「日本の原発はリルトダウンしても多重防御をしているから、放射能漏れは絶対ありません。だから周辺住民は逃げる必要ないのです」と言っていました、これも嘘でした。

事故から10年経ちました。除染作業はずいぶん進みましたが、肝心の事故を起こした原子炉の解体は、おろかその前段にあたるデブリと称するリルトダウンした核燃料の取り出しの目途もついていません。デブリの実態を調べようとしても、放射線量がものすごく高いから、いくら頑丈な防護服を着ても人は近づけません。では代わりにロボットを投入したら、あまりの高温のためにロボットはすぐ故障してしまいました。何もわかっていないから、壊れた原子炉がいつまでに解体できるかは全く見当がつかえません。

30年前に福井県に「もんじゅ」と言う原子炉ができました。夢の原子炉とも呼ばれ、原発で燃やした核燃料を、この原子炉でうまく使えば、エネルギーになり、さらに新たな核燃料をつくれるわけですから、永遠にエネルギーとして使えるという触れ込みでした。「もんじゅ」建設は1985年から始まり、10年で完成しました。しかし、動かすたびに事故を起こし、その後も事故や故障、人為ミスが数えきれないほど続き、一度も本格稼働することはありませんでした。三人寄れば「文殊の知恵」とか言いますが、30人、300人、3000人と学者や技術者がいくら寄っても、知恵は出ず、結局、廃炉しかないことが分かりました。夢の原子炉は、幻の原子炉になって、この間に注いだ税金は1兆円強。今でも動いていないのに、1日5000万円かかる無駄遣いをしています。

福島第一原発事故で幸いだったことは、4号機が爆発しなかったことでしょう。1号機から3号機までの爆発によって、放射能汚染は南東北、北関東一円に広がり、当時の民主党政権は4号機の爆発という最悪の事態を考えていました。もし爆発したら、半径250キロ圏内の住民は避難しなければならぬ。250キロ圏内は、全東北、神奈川、東京も入り、5000万人の人口があります。5000万人が避難できる場所など日本にはありません。原発は一度事故を起こしたら、全てを駄目にする本当に怖いものだと再認識しました。

原発について勉強すればするほど、日本では原発はやっていけないものだと確信しました。原発建設が始まるのは1960年代初めからですが、火山国、地震国の日本では、原発をやってはいけないと主張する学者はおりません。しかし彼らのほとんどは「反自民」だったから、自民政権は無視を続けました。日本は火山国で地震が多い。温泉はどこにでもある。このような国は原発をやったらいかん、という話を無視した結果、福島事故になりました。

繰り返しますが、そこで自民党総裁をやった私と、幹事長をやった中川さんとで、「原発はいらない」を、国民運動にすべく全国を歩いているわけです。この運動には、保守も革新もありません。



『日本の進むべき道』を題材にした小泉元総理の講演ポスター

## ● 原発に、ゴミの処分場はない

ところで、政府や電力会社、原子炉メーカーなど推進側は、原発がなくなれば、日本は電力不足になると、脅しますが、そんなことはありません。11年3月の事故から13年9月まで稼働していた原発は、わずか2基、13年10月から15年9月まではゼロ。15年10月から今日まで再稼働があったのは3基。つまり、この10年間、日本は実質原発ゼロでもやっていけることが実証されたのです。

こうした実績があるにもかかわらず、電力会社や政府は、原発再稼働を目指し、新しい型の原発を造ろうとしています。経産省は2030年の電源構成を原発20%としたいようですが、54基の原発を動かして電源の30%を確保していましたが、20%確保をするには30基の原発を稼働させる必要があります。こんなことができますか。不思議でなりません。経産省の役人には、こうした原発の夢を早く諦めてもらうしかありません。

再稼働に向けて、規制委員会もおかしい態度を取っています。福島のリルトダウン事故以来、規制委員会は新しい規制基準を作り、5年前の16年、九州電力は、新規規制基準に応じた2基の再稼働を申請しました。そして規制委員会委員長は「審査はパスしましたが、ただし安全とは申し上げられません」と、わけの分からないコメントを出しました。すると政府は、「日本は世界一厳しい規制基準を持っているから大丈夫」、と言いました。実際はどうでしょうか。アメリカでは、事故を想定した避難経路、避難計画を示さなければ許可は出しません。テロを想定した避難計画も必要です。ところが日本では、こうしたことを一切していません。

産廃処理業者は、環境に負荷をかけない産廃物を処分する場所、処分方法を示さなければ設置許可をもらえません。一方原発はどうでしょうか。原発のゴミは、一般の



小泉元総理の話を一言も聞き漏らすまいと聞き入る来場者

産廃物とはけた外れに危険で放射能を帯びた厄介なゴミです。ところが日本では、原発から出るゴミ、放射性廃棄物を処分する場所がありません。再稼働させればゴミは出るのですが、ゴミ捨て場がないのです。アメリカやロシアでも、放射性ゴミは最終処分ではなく、厳重な警備の下で中間貯蔵されています。これは、安全で有効な最終処分場がないからです。

全世界で原発ゴミの最終処分場を造っているのは、フィンランドだけです。施設の名前は、オンカロです。私は現地を視察しました。これは、本土からフェリーに揺られて15分の、全島岩盤の島にあります。処分場は、岩盤を地中400センチほど掘削し、2千平方メートルの広場を設け、核廃棄物を入れた頑丈で大きな何百本の円筒を、鉄やコンクリートを用いて岩盤に埋め込みます。フィンランドには4基原発があるのですが、全部埋め込んでも半分の2基分にしかならないと言っています。岩盤の壁をよく見ると、少し湿った箇所があります。案内人は、この湿気が5万年、10万年後には水になって、埋設した核廃棄物容器を侵さないか心配だ、と言っていました。

同じものを日本でつくろうとしても、無理だと思うのです。フィンランドは岩盤の国で、地震も火山もありません。日本は火山、地震、津波のほかにも地下水も多い国です。地中深く掘れば、どこからでも温泉が湧きます。たっ

た4基しか原発がないフィンランドですらこうした状況です。

核廃棄物は10万年先までも危険なもので、処分場は国内につくらなければなりません。いずれにしても、50数基もある日本では、最終処分場は作れるはずはありません。ゴミ処分場がないのに、なぜ日本政府は原発を動かそうとしているのか、その気が分かりません。いずれ処分法や処分場は見つかると推進側は言いますが、岩盤がない日本では、しよせん、無理な話です。

だからこそ、今こそ国民運動を展開して原発を止めないと、大変なことになってしまいます。原発に代わる電源は何か、ということになります。

実は日本は、自然エネルギーの宝庫なのです。例えば水力です。日本各地に洪水防止を目的としたダムがあります。これに発電設備を付ければ、水力だけで十分まかなえると発言する専門家もいます。やればできるということです。

原発の三大大義名分は嘘でしたと、経産省は認めて、自然エネルギーに舵を取ってほしい。自然エネルギーに関しては自民党も分かりつつあるので、日本は自然エネルギーの大国になります。

ドイツは福島事故を契機として、与野党ともに原発ゼロ宣言をして、太陽光、風力、家畜の糞を素にしたバイオマスなど、自然エネルギー発電を加速しています。スペインやデンマークも自然エネルギーを推進し、アイスランドは地熱ですべてをまかなおうとしています。

日本だって原発ゼロにできます。日本は太陽ばかりではなく、風力はあるし、地熱も水力もあります。バイオマスもあれば、森林の木材チップもあります。無限にある自然エネルギーを使えば、日本は外国での資源獲得競争に加わることはなくなります。危険な原発なしで、発展できる社会を作り上げることができません。こうした国づくりこそが、日本の進むべき道だ、と私は確信しています。だから、これだけ本気で、原発ゼロ運動ができるのです。原発推進論者が邪魔せず、総理が原発をゼロにする、と宣言すれば、瞬く間に原発ゼロになります。やればできることをなぜやらないか、これまた不思議でなりません。

## 変化に対応できる能力高い日本人

### ● 変わり身が早い日本民族

猪瀬直樹さんは、東京都知事を務める前に、「昭和16年 夏の敗戦」という本を書きました。なぜ「昭和20年 夏の敗戦」ではないのか。昭和16年4月、近衛内閣は、「日本総力戦研究所」という名のシンクタンク設置を閣議決定し、「今、アメリカと戦争したら、日本はどうなるか」を研究テーマにしました。4か月後の8月、「現時点でアメリカと戦争をすれば、日本は必ず負ける」との結論を出しました。しかし、この報告は、軍部によって「机上の空論」と退けられ、12月8日日米開戦となり、予想通り、日本は完敗しました。特攻隊という無謀な自爆攻撃で多くの若者が戦死し、東京大空襲はじめ各地で空襲に遭い、広島・長崎への原爆投下などで、300万人以上の人を命を落としました。

昭和18年。勝利を確信したアメリカは、終戦後の日本

をどうするか、どうやって再建するかを考えていました。これがアメリカでよかった。他の国だったら、どうやって日本を奴隷にできるか、どうすれば日本をつぶせるかを考えたでしょうから。このアメリカのお陰で、日本は民主国家になって、経済大国に成長できました敗戦後の日本は、鬼畜米英などと叫んでいたことなどを忘れ、アメリカの援助の下、復興に励みました。

このように、日本人は実に変わり身が早い民族であり、国家です。敗戦後の日本は、二度と戦争をしない、誰もが安心して長生きできる社会をつくる、を根底に据えて頑張りました。そして最近まで、アメリカに続く世界第二の経済大国になりました。今は、中国が世界第二の経済大国です。

かつては、「人生50年」と言われていました。長生きできなかった最大の理由は、食物にあります。かつての食事は粗末だったせい、結核患者が非常に多かった。結核は

ペニシリンが登場するまでは、不治の病と言われていました。70歳を古希と言いますが、かつては70歳まで生きる人は、まれだったから、古希と言ったのです。今では70歳はごく普通。私が厚生大臣に就いた平成元年1989年、日本の100歳以上の人の数は全国で3000人でしたが、昨年は8万人を超えました。よく多いことを例えるのに「ごまん」と言いますが、8万人だから驚きます。

このように、日本人はできないことをやってしまう民族です。昔は栄養失調で病気になったが、今は栄養過多で病気になっています。

時代は変わりました。物はないよりあった方が良いに決まっていますし、元気で長生きしてほしいものです。

元気で長生きの秘訣を申し上げれば、①バランスのいい食事②十分な睡眠③適度な運動です。免疫力を高めるには、この3条件を実践することです。痩せるためだと、若い世代は食事を取らずに薬を飲んでいますが、これでは駄目です。必ず悪影響が出ます。

私の父は65歳で死亡したから、私自身、せめて父親の年齢ぐらいまでは生きたいと思っていました。今は79歳だけど、もっともっと元気で長生きしたいと思っています。

長寿の日本人を支えているのは日本食だ、ということで、和食の素晴らしさが見直されています。今や、欧米人にとって日本で一番おいしいと人気のあるのは、寿司です。20年、30年前、日本人の誰がそんなことを考えたでしょうか。欧米人は生の魚を食べない、ワサビは辛いから食べない、パンを食べるからコメは駄目。外国人が日本で一番おいしいと言って食べる料理は、天ぷら、すき焼き、焼き鳥だ、と考えていました。とんでもない話です。

寿司は、日本食の中で一番人気のある料理として定着しています。マグロの旨さが分かったから、トロは今や、世界語になり、外国人が来るとトロばかり注文するので、すぐにネタ切れになってしまう。これでは日本人の常連客が口にできないから、寿司屋の大將は、外国人が来ると、トロを隠すとか。誰もこんな事態を想像しなかったでしょう。

もう一つ面白い話があります。イギリスのサッチャー首相は、在任中、当時の日本国内では、焼酎が安くウイスキーが高いことに不満を持ち、日本に対して、同じ蒸留酒なのに、おかしい、と文句をつけました。ウイスキーの関税率を下げろと迫りました。日本は、焼酎は大衆が飲む酒であり、ウイスキーは高所得者が飲む酒と説明しましたが、納得しませんでした。仕方ないので、焼酎の酒税を引き上げウイスキーの関税率を下げたのです。焼酎メーカーは心配したのですが、安くなったウイスキーに高級感はなく、人気は薄れ、逆に高くなった焼酎の人气が高まりました。それまでは焼酎に見向きもしなかった若い世代の人気を集めています。

好みの変化は激しい例ですが、日本人はこういった変化に強い国民です。1971年まで、1ドルは360円でした。この年、ニクソン大統領は、ドルを変動相場制に変え、日々ドル相場は変わるようになりました。経済界は変動相場制に面倒くさい、輸出がしにくくなる、などと反発したのですが、あれから50年。日本はすっかり変動相場制になれました。1ドル相場は、360円から300円、200円と円高が続き、今は110円ぐらいです。円高が進めば、日本経済は破滅するといった人は多かったのです。



「原発必要ない」  
二本松 小泉元首相が講演  
小泉純一郎元首相は17日、二本松市の福島県男女共生センターで講演し、「原発は安全でコストがかららないという話は全てうそだ」と気がついたと話し、核廃棄物の最終処分場の難しさなども指摘した。  
2030年度に原発の発電割合を約5%にする政府の計画について「事故を目の当たりにしていなからあきらめた状況だ。考えを改めてもらいたい」と批判し、「自然エネルギーを利用すべき」と述べ、政府にエネルギー政策の転換を求めた。

4月18日付河北新報の朝刊記事



自然エネルギー利用の政策 小泉元首相が求める  
小泉純一郎元首相は17日、二本松市で講演し、「原発事故後、原発がゼロでも一日も停電しないことが立証された。無限にある自然エネルギーを利用すべきだ」と述べ、政府にエネルギー政策の転換を求めた。

4月18日付福島民友の朝刊記事

が、破滅はしていません。日本人は環境に順応するのが得意なのです。

環境の変化を敏感に察し、それに即して対応する。開国は駄目としていたが、開国して発展する。アメリカは敵だと言っていたけれど、アメリカを最大の友好国とする。石油がなければ、なくても済むような体制に変えていく。日本人はこのように、変化に適応できる能力が極めて高い、と思います。

## ● 目的を持って生きよう

長生きできる社会になり、待機児童ならぬ待機老人という言葉があります。100歳以上の人が入っているホームで、元気な老人に「何が楽しみですか?」と聞くと、「孫が見舞いに来てくれること」と返事する。で、「お孫さんは何歳ですか?」と聞くと、「還暦になった。」と返事。それだけ日本は、元気で長生きという目標を達成しています。

政治家の中で、この人の記録は破られないだろうという人がいます。それは、尾崎幸雄、尾崎弴堂です。弴堂は、明治23年、1890年の第1回総選挙に33歳で立候補し

て初当選。以来、明治、大正、昭和の各時代を生き、昭和26年に95歳で死去するまで、大選挙区、中選挙区、小選挙区で連続25回当選しました。私は連続12回当選で引退です。尾崎さんの25回に並ぶまでには13回も足りないのです。

彼は戦前、日本は戦争をすべきではない、と主張していたから、「憲政の神様」と呼ばれ、亡くなった後は、「尾崎記念会館」が、今は憲政記念館に代わっていますが、国会議事堂近くに建っています。

その記念館前には、「人生の本舞台は、常に将来にあり」と刻まれた石碑があります。この言葉は、彼が亡くなる1年前、94歳の時に話したものです。自分が役に立つかもしれない場所は、将来にあり。亡くなる年の前年にこう言いました。普通90歳過ぎれば、世の中なんかどうでもいいでしょう。しかし、この言葉には、またいつか自分が必要とされる時が来るかもしれない。それに備えて能力を高めようという向上心を持ちながら、死ぬまで頑張ろうという意味だと、私は受け止めています。

向上心を忘れてはいけません。自分だって、総理を辞めてから原発ゼロ運動を展開するとは思っていませんでした。江戸時代後期に佐藤一斎という儒学者がいました。彼の言葉に「壮にして学べば、老いて衰えず、老いにして学べば、死して朽ちず」というものがあります。これは、常

に学ぶことが大事、向上心が大事ということです。先ほど述べた三つの長寿の秘訣、そしてこの向上心を持って生きれば、元気で長生きできます。私は、原発ゼロという目標、目的をもって生きます。皆さんも目的を持って生きることが大事だと思います。一緒に日本が発展するような国づくりをやりましょう—

## ● 太陽が昇るから朝が来る

小泉元総理の講演が終わり、「生き方塾」の濱田総一郎副塾長が閉会のあいさつに立ち、次のように話をしました。

「雨にもかかわらず、『下村満子の生き方塾』10周年記念公開講座に多数の方が来場していただき、ありがとうございます。小泉さんの話は、10周年に相応しい、予定時間をオーバーするサービス精神あふれる講演でした。小泉さんは言いました。日本人は変わりが早い国民だと。日本のエネルギーは、化石燃料、原発に頼っていますが、小泉さんは自然エネルギーだけで日本はやっていけると断言しています。朝が来るから太陽が昇るではありません。太陽が昇るから朝が来るのです。エネルギーの夜明けも、自然エネルギーが立ち上がって始まります。大きなうねりを共に作りましょう」